

脂質生化学研究会

会 報

1978年2月

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

53年度会費払込のお願い

- 昭和53年度会費2,000円を、3月末までにはさみ込みの振替用紙でお払ください。

本年度の隣演集の作成に必要ですので、明日にせず、今日お払込みください。

- 振替用紙は1人1枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口で備えつけられている用紙をご利用ください。

会費送付先

振替番号 東京4-91400

日本脂質生化学研究会

- 本年よりご入会希望の方がありましたら、事務局まで電話でご一報ください。会報をお送りいたします。

- 本年より退会なさる方は、電話でご一報ください。

事務局 (03)964-1211 内線2320

2321

(担当 福島又は植田)

- 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり或いは、他の場所へ転出された時は、お手数ですが、返送または、転送をお願いします。
- 会員名簿を作成いたしました。誤り、変更等ございましたら葉書でご一報ください。研究会の味に訂正表を出します。

事務局 東京都板橋区加賀2-11-1 (〒173)

帝京大学医学部生化学研究会事務局

日本脂質生化学研究会事務局

TEL (03)964-1211

内線2320

2321

第20回日本脂質生化学研究会・記念講演会

本研究会開催第20回を記念して、次のような講演会を開催いたします。
研究会前夜ですが、ご都合がございましたら是非ご参加ください。(入場無料)

日 時 6月14日(水)

午後5時30分→7時15分

場 所 東京田辺製薬株式会社

本社講堂

東京都中央区日本橋本町2丁目7番地3

TEL 03(241)5151

演者および演題

(1) 和久敏蔵氏(帝京大・薬学)

アルキルおよびアルケニル型リン脂質の生化学

(2) 村松敏夫氏(東京医歯大・教養)

プラスマローゲンの生合成と、関連する前駆体の化学合成

(3) H.K.Mangold氏(Institute für Biochemie und
Technologie)

Biological effects and biomedical applications of
alkoxy lipids

第20回日本脂質生化学研究会のお知らせ

会員の皆様もすでにご承知のとおり、本研究会の演題数は年々増加し、もはや2日間の研究会では十分な討論が不可能になって参りました。

今回は本研究会の発足以来20回を数えますので、これを機会に、本会発足の趣旨に立ち帰って、発表された内容を相互に深く討論する研究会にいたしたく存じます。

つきましては、今回は講演申込要旨(400字)をもとに、誠に勝手ながら、本年度の研究会実行委員会、演題内容によるグループ別けをおこない、場合によってはグループ毎のパネルディスカッション、グループ毎のポスター展示という従来とは異なった発表形式をとることをお願いするかもしれません(発表形式は、講演専用原稿用紙をお送りする時に、お知らせいたします)。2日間という制約の中で、できる限り充実した討論会にと考えて居りますので、上記の件、ご賢察の上ご了承ください。

① 第19回総会(京都)での決定により、第20回研究会を、下記により東京でおこないます。

実行委員 原 一郎教授(東京医科歯科大)

金子 弘教授(北里大)

村松敏夫教授(東京医科歯科大)

期 日 昭和53年6月15日(水) 16日(木)

場 所 千代田生命本社講堂(東京 日比谷)

② 講演申込要領

講演申込みは、演題、演者、400字程度の要旨を添えて4月10日(日)必着で下記事務局にお送りください。

東京都板橋区加賀2-11-1 (〒173)

帝京大学医学部生化学教室内

日本脂質生化学研究会事務局

TEL(03)964-1211 内線2320,2321

③ 講演集原稿

講演申込みを頂いた方に、講演集原稿用紙をお送りします。

原稿は必ず黒インキ又は黒ボールペン、あるいはタイプで印書して

5月1日(月)必着でお送りいただきます。原稿用紙は例年の如く、一枚1433字詰、4枚を原則とします。どう努力しても4枚を超過する場合は、電話で事務局 植田までご連絡ください。

④ 講演集

6月上旬に、53年度会費納入済みの会員にご送付申し上げる予定です。

⑤ 講演時間

一般講演は討論を含めて、20～25分を予定していますが、演題の内容によって、冒頭に記しましたような、他の発表形式をお願いする場合がありますをお含みおきください。

⑥ 研究会参加費用

現在次の様に予定されています。

研究会参加費 2,000円

⑦ 懇親会

53年6月15日(木)夜に開催する予定です。多数ご参加ください。

懇親会費は3,000円の予定です。

⑧ 宿泊に関する案内

今回は宿泊に関するお世話はいたしませんのでご了承下さい。

53年度日本脂質生化学研究会総会および幹事会のお知らせ

◎ 総会 53年6月16日(金)午後の研究発表が始まる前に、研究会場で開催いたします。

◎ 幹事会 53年6月15日(木)昼休憩時におこないます。幹事の皆様に別途ご案内申し上げます。

会の活動状況

① 第19回日本脂質生化学研究集会

昨年の研究集会は、京都市、京都会館内の二会場で、6月16日(木)17日(金)の二日間開催された。梅雨の季節のこととて、あいにくの雨もようであったが、野田万次郎教授およびスタッフの皆様のご努力で、331名の研究会参加者があり、105の演題が報告された。

この多数の演題を消化するため、討論を含めて一演題15分の時間しか割り当てられなかったために、せっかくの討論が打ち切られてしまったり、予定時間を越えて会全体の進行に影響を及ぼしたり、また発表自体が粗雑になってしまったりして、十分に討論をして互に勉強をするという研究会の雰囲気は薄れてきた感じがしないではなかった。

勿論このことは、52年度の研究会の運営に当られた京都府立大学や座長をお引き受け頂いた会員の皆様の責任ではないことは云うまでもない。会員全体の問題として考えなければならない問題であろう。

第1日の夜、京都会館隣のルレ・オカザキ二階で懇親会が開催された。100余人の出席があり、和やかに雨の京都の一夜を過ごした。

研究集会の運営に陣頭指揮を執られた野田万次郎教授および教室のスタッフの皆様、ならびにアルバイトの学生諸君に心からお礼を申し上げます。

② 第19回日本脂質生化学研究会総会

52年6月17日(金) 午後1時より第1会場に於いて開かれた。

原一郎会長より、以下の如き会務報告、および提案事項があり、承認された。

○ 会務報告

会員構成 正会員507名 賛助会員23社 名誉会長1名

研究会・講演会の開催 52年度研究会の進行状況および来日外国

研究者の講演会などの状況

○提案事項

名誉会員推薦の件 数野太郎・山添三郎・木村雄吉・山崎三省・永井淳爾の諸氏を、永年本研究会に研究発表をおこない、またその発展に尽力された方として名誉会員に推薦する。

次回(第20回)研究集会開催の件 第20回を会長原一郎氏が担当、東京で開催する。

次いで植田伸夫庶務幹事より、本研究会の計理の中間報告があり、舟橋会計監査より、51年度決算および52年度中間報告に関する監査報告がなされ、承認された。(52年度決算報告および53年度予算は別掲した)

③ 千田奨学金贈呈

52年度千田奨学金は、腎山洋石氏(東大医学部)伊藤俊洋氏(北里大、教養部)の両氏に贈られた。

(昨年の会報中に年令制限40才を35才と誤記し、関係方面にご迷惑をおかけしたことをお詫びします。54年度の応募締切りは53年12月25日です。年令制限40才以下で、応募用紙は事務局にありますので、ご請求ください。)

尚、現在までの千田奨学金受領者は下記の方々です。

千田奨学金受領者

第一回 1970年度 2名

赤 沼 安 夫 東京大学医学部第三内科 研究生 医学博士
「血漿 Lecithin:Cholesterol Acyltransferase の研究」
中 野 益 男 帯広畜産大学農産化学科 研究生 農学修士
「スフィンゴ脂質の酵素的合成」

第二回 1971年度 3名

橋 本 隆 京都大学医学部医化学 助教授 医学博士
「アセチル-CoA カルボキシル化活性の調節機構」
谷 口 正 子 札幌医科大学第二生化学 助手
「ラット肝リン脂質の代謝—細胞顆粒間のリン脂

質の交換について」

田 宮 恵 子 静岡薬科大学 助手
「Clostridium butyricum の脂質代謝、特に
ルデヒド含有リン脂質について」

第三回 1972年度 2名

植 田 伸 夫 東京都養育院老人総合研究所
生化学第一室長 医学博士
「腫瘍細胞の脂質代謝の研究」
矢 野 郁 也 関西医科大学医化学 講師 医学博士
「細菌における α -ハイドロキシ脂肪酸の分布と脂
肪酸の α -酸化」

第四回 1973年度 3名

奥 山 治 美 名古屋市立大学薬学部 助教授 薬学博士
「リン脂質の脂肪酸のパターンを決めている機構」
村 松 敏 夫 東京医科歯科大学教養部 助教授 薬学博士
「リン脂質の合成と物理化学的研究」
石 塚 稻 夫 東京大学医学部生化学 助手 医学博士
「微生物および哺乳類のグリコシルグリセリドの
構造と代謝」

第五回 1974年度 3名

飯 田 静 夫 東京大学医学部生化学 助手 医学博士
「糖脂質の生化学的研究」
大 島 美恵子 北里大学医学部生化学 講師 医学博士
「好熱性細菌の脂質に関する研究」
山 下 哲 京都大学医学部医化学 助教授 医学博士
「Glycerolipid 合成系の酵素的な研究」

第六回 1975年度 1名

野 沢 義 則 岐阜大学医学部生化学 助教授 医学博士
「Tetrahymena 膜脂質の研究」

第七回 1976年度 1名

木 村 光 京都大学農学部食品工学科 助教授 農学博士
「微生物におけるリン脂質分画の代謝・生化学的研究」

第八回 1977年度 2名

伊 藤 俊 洋 北里大学教養部 講師 農学博士
「酵母の新リン脂質、ピロホスファチジン酸の生化学的研究」
青 山 洋 右 東京大学医学部生化学 助手 医学博士
「GC-MSを用いた脂質の化学構造、代謝及び代謝異常の研究」

④ 幹 事 会

6月16日昼憩時に、平安閣で開催され、前記総会への報告事項が審議された。

52年度研究集会の演題数が105題と数え、そのために講演集が430頁を越える大部のものとなり、講演集の製造原価が、一冊当り2,000円を越えるようになったことなどから、会費値上げも議論されたが、広告収入が順調に入金すれば、値上げの必要はないこと、および郵便料の大巾値上げ等の予測できない出費があれば、年度途中でも会費の値上げ、追徴をお願いするとのことで、53年度は会費値上げをせずに運営することを了決した。

次いで名誉会員について推薦規程が明確ではないという議論があったが、研究会初期の頃、研究集会の実行委員会をお引き受け頂いたり、熱心に研究発表をつづけてくださった方数名をご推薦申し上げ、末長く会員として、研究会のためにご意見を頂くことにした。舟橋会員も名誉会員にご推薦申し上げるとの意見が出されたが、ご本人よりまだしばらく現役のまゝでというご希望が述べられ、今回は見送られた。

⑤ 在京幹事会等

52年12月22日 東大医学部生化学教室に於いて、原会長、山川、

飯田、赤松、児島、金子、村松、内藤、原島、植田（順不同）および事務局 島崎の諸氏が集まり、在京幹事会を開催した。

まず、在京幹事会は、原会長の諮問に応ずる集りであるという位置づけを確認して、会議を開き、52年度の会務の状況、52年度の決算報告、53年度予算について審議し、別掲の如く決定し、幹事会および総会に提出することにした。

53年の第20回研究集会は、会場を第18回と同じ千代田生命本社講堂（東京 目黒）とすることにし、H.K Mangold 教授を招待講演者として、前夜に記念講演会を開催することを決め、その運営も共に第20回研究集会の実行委員にゆだねられた（挿入赤頁裏面参照）。尚この席上で、研究集会の発表の形式が論議され、演題数が多い場合は、実行委員は勇気をもつてこれに対処することを要請された。

更に会長、庶務幹事、会計監査は会則により任期2年であり、51年の総会で選出され、53年の総会で任期満了となるため、上記役員の改選をおこなうことが話題にされた。

54年度の研究集会に関しては、富山大薬学の長谷純一教授から引き受けてもよい旨内諾があったと、山川幹事より報告があった。

その他、53年度の会報の発行について検討がおこなわれ、原稿の依頼先など意見が出された。

⑥ そ の 他

本年も多く外国研究者の来日を見た。殊にIUPACやFAOBが日本国内で開催されたために、各地でいろいろ講演会が開催されたようである。

お申し出のあった二、三の講演会について、事務局の可能な範囲で、講演会通知、謝金補助などを斯学振興事業の一環としておこなった。

昭和52年度決算および53年度予算

収 入 の 部

項 目	昭 和 5 2 年 度		昭和53年度
	予 算	決 算	予 算
正 会 員 会 費	1,100,000	1,067,000	1,000,000
賛 助 会 員 会 費		230,000	230,000
講 演 集 売 上 げ		52,500	52,500
広 告 収 入	300,000	588,350	600,000
寄 付 金	0	111,000	0
利 子	0	3,675	3,675
小 計	1,400,000	2,052,525	1,886,175
前年度よりの繰り越し	254,501	254,501	532,779
計	1,654,501	2,306,526	2,418,954

支 出 の 部

項 目	昭 和 5 2 年 度		昭和53年度
	予 算	決 算	予 算
研 究 集 会 補 助	0	0	100,000
会 報 製 本 費	70,000	72,000	120,000
講 演 集 製 作 費	1,000,000	1,295,500	1,400,000
旅 費	30,000	9,624	30,000
郵 送 料、通 信 費	250,000	197,163	250,000
印刷費(封筒、用紙等)		105,150	0
事 務 用 品 費		810	1,000
事 務 経 費		50,000	50,000
会 合 費		15,500	30,000
特 別 講 演 謝 金 等		30,000	30,000
小 計	1,350,000	1,773,747	2,011,000
次年度への繰り越し	304,501	532,779	407,954
計	1,654,501	2,306,526	2,418,954

日本脂質生化学研究会研究集会の歴史

本研究会の第1回研究集会が開催されたのが昭和36年6月17日であつた。それから数えて来る6月で満17年になる。

初代の会長安田守雄氏は現在ご病氣専心療養中であり、昨年末に原現会長がお見舞に上つた所、特にお褒りもなかった由である。

そして、創設当時いろいろご尽力くださった先輩方が、お元気ででありながら、一人また一人と現役を退いて行かれるのは、時の経過とはいふものの淋しい限りである。しかし一方では次から次へ若い会員諸君の参加がある。勿論それらの人の中にも数年ならずしてテーマが脂質から離れて行く人もあろうし、またドブブリと脂質領域にはまり込んでしまう人もあるであろう。

いずれにせよ“袖摺り合うも他生の縁”、中高年層にとっても、若年層にとっても、日本脂質生化学研究会がどのような集会を開催して今日に至ったかを思い出し、知つて頂くのも何かの役に立つことと思ひ、20回の集会を列記してみた。

第1回 1961年6月17日 東京(日本化学会講堂)

演題及び講師

脂質のペーパークロマトグラフィー

野田万次郎氏

シリカゲル・クロマトストリップ法による分析

赤沢 堯氏、今関 英雄氏

³²Pを用いるリン脂質の分析

丸尾 文治氏

脂質研究の動向

安田 守雄氏

赤外吸収、核磁気共鳴の脂質分析への応用

千原 呉郎氏

血清脂質のガスクロマトグラフィー

高橋善弥太氏

以上特別講演、出席者約200名

第2回 1961年11月7日 大阪(藤沢薬品本社講堂)

演題及び講師

貝類の脂質

堀 太郎氏

ホスホリパーゼAに関する二、三の知見

グルタル酸の代謝
血清脂質の定量
結核菌脂質の生物学的活性
Hydroxyl Steroid の特性とそのクロマトグラフィー

斉藤 国彦氏
早石 修氏他
安田 守雄氏
山村 雄一氏

数野 太郎氏

以上特別講演、出席者約180名

第3回 1962年6月16日 東京(東大医学図書館講堂)

実行委員 安田 守雄氏 原 一郎氏

特別講演

複合脂質の研究 山川 民夫氏他

一般演題 9

第4回 1962年11月2日 東京(東大医学図書館講堂)

実行委員 山添 三郎氏 林 浩平氏

特別講演 山添 三郎氏

一般演題 8

第5回 1963年 6月7、8日 仙台(日立ファミリーセンター)

実行委員 奥井誠一氏 箱森仙一氏 内山充氏

特別講演

脂質代謝及び脂質栄養の特殊性 安田 守雄氏

シンポジウム「脂質の生物活性」

A 細胞下顆粒における脂質 4題

B 細胞膜透過に関する脂質 3題

C 生化学的特異性を有する脂質 5題

一般演題 22

第6回 1964年6月5、6日 東京(日仏会館)

実行委員 木村 雄吉氏 山川 民夫氏

一般演題 25

第7回 1965年6月4、5日 滋賀(滋賀大学)

実行委員長 堀 太郎氏

一般演題 33

第8回 1966年6月3、4日 広島(広島大学)

実行委員長 数野 太郎氏

一般演題 44

第9回 1967年8月17、18日 東京(日仏会館)

実行委員 安田 守雄氏 原 一郎氏

一般演題 30(日本19、USA 5、UK 3、Israel 2、Italy 1)

第10回 1968年5月31日、6月1日 東京(東大医科学研究所)

実行委員長 永井 克孝氏

シンポジウム 8

一般演題 31

第11回 1969年 7月22、23日 札幌(共済ビル)

実行委員 今井 陽氏 大野 公吉氏

シンポジウム 14

一般演題 34

第12回 1970年7月21日22日 群馬(伊香保温泉観山荘)

実行委員 山添 三郎氏 林 浩平氏

シンポジウム 肥満の脂質代謝 4題

一般演題 42

第13回 1971年7月16、17日 静岡(県立中央図書館)

実行委員長 松本 亮氏

一般演題 53

第14回 1972年6月10、11日 大阪(関西医大)

実行委員 斉藤 国彦氏 河波 順一氏

特別講演

脂質領域におけるGC-MSについて

G. Odham氏

一般演題 58

第15回 1973年6月8、9日 東京(薬学会館)

実行委員長

野島 庄七氏

一般演題 69

第16回 1974年5月17、18日 松本(厚生文化会館)

実行委員

武富 保氏 橋本 隆氏 金井 正光氏

特別講演 2

Retinol-Binding Protein and Vitamin A

Metabolism D.S. Goodman氏

Pyruvate Dehydrogenase as a Control

Step in Fatty Acid Synthesis from Carbohydrate

O.H. Wieland氏・他

一般演題 66

第17回 1975年7月11、12日 倉敷(川崎医科大学)

実行委員

山崎 三省氏 日下 喬史氏 市原 宏介氏

一般演題 70

第18回 1976年5月20、21日 東京(千代田生命本社講堂)

実行委員

児島 英也氏 植田 伸夫氏

一般演題 71

第19回 1977年6月16、17日 京都(京都会館)

実行委員長

野田 万次郎氏

一般演題 106

第20回 1978年6月15、16日 東京(千代田生命本社講堂・予定)

実行委員

原 一郎氏 金子 弘氏 村松 敏夫氏

20 回目の研究集会を迎えて

1963年の6月に、第3回と第4回の講演会の合本が、脂質生化学研究1963という形で作られている。この“あとがき”で、舟橋現会計監査が、“来る6月の仙台での会でのように、一般申込演題だけでも21題という多数になると、1題10~15分という学会の総会での発表と変らないものにならざるを得ず、本会の隆盛をよることだけでは済まなくなる。今後この傾向が強まるとすると、この辺りで将来のために会のやり方を考えてみる必要があるのではないか。”と書いて居られる。歴史はくりかえすというが、今日また將にその時が来たようである。

第20回大会に際しての反省

山川 民夫

はじめの中は年に2回も会合を行ったこともあるので、20年にはなっていないが、よくここまで続けて来たというのが今の感想である。安田守雄会長と舟橋三郎先生を助けて原一郎氏が実質的に運営されて来た努力には改めて敬服する次第である。

生化学関係のこの種の集会としてあった核酸や酵素のシンポジウムなどは姿を消してしまい、蛋白質構造討論会は未だ隆盛であるが、やはり世話人が折角つくった会を愛し育成する気持がなければ結局解体してしまう。消滅する理由はあまりに演題数が多くなりすぎてさばき切れなくなったことや、その学問が変貌、転進するなど様々であろう。たとえ慣性で続けても内容が粗末になれば多数の人にその便を向かれる。会員と演題数の増加のみから隆盛になったとはいえない。本会も時々はこの存在理由を論じ脱皮する努力をしなければならない。

日本生化学会も会員数7,000名に達し演題数は1,000をこえて久しく、発表形式についてもいろいろ試行している。会員の権利だからといってレベルの低い内容が発表されるならば寛容な人格者の集りという特色を有する本会の会員諸氏も時間の無駄という感じを持たれるに違いない。会の水準は会員の實力の反映ではあるが、学問の水準を維持していくためには、恥かしい

ものは出さないという各自の意識の問題に帰するだろう。

学会に出して叩いて貰ってのばすのも必要だが現実問題としてはそれ程の時間もないしそれ程の親切な人も少ないのだから、研究会に出す前にそのグループで十分討論して後に発表すべきであろう。

また世話人の側でも、いろいろ工夫をして、発表方式に変化をもたせるなどもマンネリズムを避けるためには必要と思う。

脂質生化学研究会への提案

東大・医・生化 飯田 静夫

学会発表でいつも問題になるのは会期や会場数にくらべて発表演題数の多いことである。このため技術的にいろいろの対策が立てられている。会期を延長する、会場数を増す、演題を制限する、発表時間を短縮するなどであるがいずれも実現にはいろいろな困難を伴う。

特に学会発表の本質からみると討論時間のない発表は無意味といってよい。討論がなければ発表は一方的なものとなり、論文を読んだ方がよいということになる。現在のところポスターによる発表はやや有効な対策と考えられるが、これも対象とし得る人数が会場に集まる人にくらべてかなり限られたものでしかない。

脂質生化学研究会も演題数が百を越え、二日間、二会場という方式を固定したままとすると何らかの改善策をとらない限り多岐にわたる結果は期待できない。幸にも脂質研究会の抄録は刷上り4頁と他の学会にくらべ恵まれており、またこの会への出席者は生化学会などにくらべるとかなり狭い範囲に専門が集中している。こうした特色を生かして、この会での発表に次のような方式を取り入れることを提案したい。

第一に演者は抄録に書いたことは口頭で発表しないこと。ただその追加、訂正のみを発表する。これで浮いた時間はすべて討論に当てる。第二に演者は自分の発表に対してコメントしてもらいたい人を前もって抄録に書いておく。第三にプログラム編成時にできるだけ演題のグループ化を計り、時間の割り振りはそのグループごととしてその中での時間の使い方は座長に一任する。

この方式での発表は次のようになる。

1. 座長は演者を紹介し、追加発言の有無を聞く。 2. 演者が追加、訂正の発言をする。 3. 演者の希望した発言者によるコメント。 4. 一般討論。この順序でグループのそれぞれの発表が終わった時、そのグループ内で更に討論すべきものがあれば時間のゆるすかぎり討論を行う。

この方式なら従来と同じ時間内にかかりの討論時間がとれる筈である。勿論どの演題にも同じ討論時間である必要はない。

この案の実行にはプログラム編成時にグループ分けと時間の配分を十分考慮する必要がある、また座長の運営に対する比重が大きくなるがその点がいま行けば成功すると考えられる。

そもそも脂質生化学研究会はこうした論議を十分に尽くそうという意図から始まったことを思いおこして、従来の方式のマンネリズムを打破し、効果的な発表を行うためにこの試みを実行していただきたい。

20周年を迎えて

堀 太郎(滋賀大、教育)

早や20年経ったと驚くより、仲々たななかった20年と言った方が自分の感じにぴったりくるものがある。と言うのも、1、2回の欠席を除いて毎回発表し、しかも、できるだけ私自身も発表に加わるように努めたこと、また、内容が脂質の構造に関するものだから常に誰かから文句を貰うだろうと思う緊張感を伴っていたからである。ところが、近年、出席の度毎に緊張感と共に或る種のイラダチを覚える。それは、この会の発足の日の宣言「会費100円、フリートキングで活発な討論を行うことを第一義とし、おおよそ学会という名の団体にはしない」が、何とかかとか理由がつけられて次第に変化し、今や日本生化学会脂質部門の春期大会の観を呈すようになり、設立の意義が薄れてきていることに気をもむためである。

研究会を最中(もなか)に替えてみると、中味のフンは発表内容や件数であり、皮は会の運営力であろう。われわれが求めている最中は大学最中の大看板ではなく、小さくとも独特の風味を備えたものであることは前述の宣言からも明らかであるところである。活字になった論文からは窺えないような着想

の由来や問題点、それを解決した苦労話なども時間をかけて聞きたいし、また、タタキ合いも結構なことである。そのための時間がほしいので、会期を2日間とし、1題25分間（発表10分＋討論15分）とすると、2会場で50題ぐらいとなり、件数をしぼる結果となるが止むを得まい。日数や時間の制約だけでこの20年間に発展、膨張した広範な領域から、貴重な演題を取捨することによって失われるものの多いことが恐れられるが、上述の趣旨に沿った批判に充分耐え得る演題に限ることが必要でなかろうか？ 矢張り初めに決心したことは忘れない方がよいように思う。

会 員 の 方 々 か ら

日本脂質生化学研究会の国際集会について

原 一 郎

日本脂質生化学研究会はその役割の一つとして国際脂質生化学研究会（International Conference on Biochemical Problems of Lipids, その後 International Conference on the Biochemistry of Lipids, ICBLと改名）に対応するとの一項があるが、本研究会が国際集会がかつたものを行った事があるのを御存じない若い会員の方もあろうと御紹介しておく。

1967年8月19～25日第7回国際生化学会議が、東京ではなばなく開催された。この会議に脂質領域でも相当多数の外国人研究者が来日したが、このことは前もって予測可能であったので、本研究会で、これらの研究者と討論を行う事が有意義であると考えて、特別講演をして貰うことを企画した。

1967年（昭和42年）の研究会は第9回に当り、上記目的のため、日をずらして8月17日と18日二日間日仏会館で行うことにした。

一方国際生化学会の方は Symposium が1 Colloquium が2で、これらはすべて招待講演者で、この他に一般演題があつたが、申込演題数が多く、外国からの申込も可なり不採用になつて来た。そこで、不採用分も含めて別に申込を受ける事にして、本研究会を Premeeting とした訳である。

申込期限を4月末日とし、残念乍らお礼も何も経済的援助は全然出来ない旨を明記したが、いふなれば全く国際生化学会議によりかゝつた研究会であつた。

第8回の予集集を見られると日本語と英語が混っているが、日本語の部分は日本語で発表が行われた。

座長は大ものを配したつもりであつて、（敬称略）7) T.W. Goodwin 8) Horning 夫妻の発表を R.M. Burton, 10) P.J. O'Brien, 12) R.M. Burton のを E.C. Horning, 18) J.W. Porter らのを F.A. Kummerow, 20) F.A. Kummerow を A.A. Benson, 24) J.N. Hawthorne のを E. Klenk,

27) O.Stein, 28) E.Shafrir を J.N.Hawthorne という具合であって、日本人の方々は、大野教授が O.S.Privett の時すわられた以外すべて日本人の発表の座長をつとめられた。

研究会は非常になごやかに、そして活気ある討論が行われ非常に有意義であった。

懇親会の前にマイクロバス二台で東京のハイウェーをドライブして、和気あいあいの内に懇親会場であるパレスサイドホテルのアラスカに案内したが、この時はあとにも先にもこれっ切りであるが、会長招待宴とした次第であって、良く出来たものだと思っている。

今後いつ、このような会合が持たれるか知らないが、将来いつの日にかヨーロッパから出て行かないと頑張っている ICBL をおびき出して、JCBL との Joint Meeting を開く日のあることを願っておき、そのためにも Application Form 等も保存しておくつもりである。

「とにかく原稿用紙を枚をうめること」

井 上 圭 三

植田先生から何か書くようにと強迫を受けました。私のような若造が何を書けばよろしいのでしょうかと御相談しましたところ、

“脂質生化学研究会は実にくだらない、こういう会はもうやめちまったらどうだというような内容はどうか” という大変危険思想のはらんだ御指示をいただきました。実のところ、私はなんとも穏健派でありまして、すでに存在するものをひねりつづねる革命的な事はまったく望まぬところでありますし、なにより “くだらない” などとはまったく思っておりませんので別の事でなんとか原稿用紙をうめるはめになりました。“日頃思うことでもよろしい” とのことですが、融通のきかないタチでして、例によってリボソームの事位しか頭にうかんでこないのですから、まことに、今回は人選を誤ったか、おそらくは全て承知でアイツをいじめてやろうという会報編集？の諸先生方のイヂワルではないかと、実にイライラしながら頭をかかえております。しかたがありませんので、16年間、脂質研究のほんの一端にたずさわってきた者としての想いをちょっとひわり出してお茶をにごす

事に致します。

16年前野島先生の元に「カルジオリビンの合成と免疫化学的特異性」というテーマで大学院生活をはじめたわけですが、カルジオリビンと抗体の反応はなんともたよりない特異性しか示してくれませんが、以来すっかり脂質の関与する反応は非特異的であるという偏見にとりつかれて今日にいたっております。その後、リボソームをやり始めましたが、蛋白質を導入しないかぎり何をやっても非特異的な結果ばかり得られます。耳をすますとリボソームを用いて得られる結果は特異的な生物反応のノイズ、バックグラウンドにすぎないとか、生体膜において脂質分子は“のり”であるとか“スベサー”であるとか、いささかカチンとする話が続いてきます。しかし考えて見ますとカチンとする必要はありません、これはむしろ大変重要なことである事にやっと気が付きました。生物は全ての面で厳密な事をやっているわけではなく、厳密さの蓄積によって生ずるヒズミのしわ寄せを“ルーズ”な脂質が荷っている様にも思います。生体膜を覚えてみても、脂質分子は lateral diffusion, flip-flop とか anisotropic molecular motion などという運動を示す程ルーズであるから膜はそうとう“ゆるぐう”がきくと考えられます。しわ寄せを荷って、すきまをうめるものであっても脂質分子はきわめて co-operative に運動するところがみそでありまして、このために情報を増幅したり、膜面に広範囲に伝えたり、膜の反対側に伝えたり出来る可能性も考えられるわけでありまして、もっと積極的に特異的に機能する脂質もきっとあるはずでしょうが私の勉強不足で今日まで明確な機能と結びついた特異的脂質は思いあたりません。私自身は脂質の有する“不明確さ”、“あいまいさ”にも興味がありますのでこの点も今後もしつこく追ってみたいと思っております。そんなわけのわからない事やるならせめて扱う物質は純粋できちんとしたものを使えよという野島先生の厳命もありますし、本研究会の先生方の目も光っておりますのでその点は充分注意していきたいと思っております。

日本脂質生化学研究会会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学研究会 (Japanese Conference on Biochemistry of Lipids, JCBL) と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展、向上を図り、あわせ研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために次の事業をおこなう。

- (1) 研究討論会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (3) 名誉会員をおくことができる。名誉会員は幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員

本会は、その運営のために次の役員をおく。

- (1) 会長1名、庶務幹事1名、会計監査1名、幹事若干名をおく。
- (2) 会長、庶務幹事、幹事は幹事会を構成し会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (3) 会長、庶務幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたけない。
- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長は幹事会に出席して意見を述べるができる。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認す

る。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するため、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、1月1日より翌年12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は会計監査によつて、監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員に便宜を供する。

- 附 則
- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
 - (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。
 - (3) 本会の事務局は、帝京大学医学部生化学教室に置く。
(〒173) 東京都板橋区加賀2-11-1

編 集 後 記

2月1日発送を目標にはじめた会報作成作業でしたが、会報を3月に発送した時もあったことを発見して、気がゆるんでしまいました。この間にも、今年の研究会はいつ？どこで？という問い合わせの電話が、しはしばあります。

さて今回は20回記念ということで、研究集会20回の歩みを整理して掲載しました。多勢の方が実行委員として研究集会の運営に当られましたが、公式には、実行委員長安田守雄氏と記録されている集会在いくつもありました。その場合、実際に研究集会運営を担当した方も併記させていただきました。なにぶんにも、事務局で記憶をたどりながらした作業ですので、失礼に当る誤りがございましたらご寛恕くださるようお願いして、ご指摘、ご連絡いただければ幸いです。

昨年お約束をいたしました名簿を作りました。移動、誤りなどできる限りなように注意したつもりですが、何しろ、日常の仕事の片手間にこなす作業ですので、尚多くの誤りを含むことを恐れています。総会の時に、正誤表を出すつもりで居りますから、誤りを見つけれましたら、早急にご連絡いただければ幸いです。この名簿作成にフナコシ薬品の樋口氏の絶大なお協力を頂いたことを付記して、感謝いたします。

(事務局 植田 福島 島崎)